患者への理解 地域に広げよう

専門医の遠隔診断に着手
診療ネットワークを強化
啓発活動や情報発信に力

飯田さん　木下さん　松村さん

医療鼎談　てんかんを考える

てんかんは日本人の100人に1人が患っているとされ、誰もが発症する可能性のある脳の病気です。てんかん診療の現状や課題、新型コロナウイルスワクチンの影響などについて、専門医、行政、地域医療の関係者が話し合いました＝敬称略。（コーディネーターは広島大副理事・山内雅弥さん）

広島大病院
てんかんセンター長
飯田 幸治さん

広島県医師会会長
松村 誠さん

広島県健康福祉局長
木下 栄作さん

―てんかんの診療はどこまで進んでいますか。

飯田　てんかんは大脳の神経細胞が異常に興奮し、突発的なけいれんや意識消失を繰り返し起こす慢性疾患です。3歳未満の幼児と75歳以上の高齢者の発症率が高いですが、どの年代でも発症します。ほとんどが後天的な要因で、感染症や頭部外傷などが原因で起こる場合もあります。高齢者の場合は、脳卒中をきっかけに発症するケースが増え、認知症との関連も指摘されています。

治療は薬物療法が中心です。近年の抗てんかん薬は副作用が少ない点が特長です。「難治性」と判断した場合は、発作を引き起こす脳内の「焦点」を切除する手術を検討します。緩和手術として、発作の程度を軽くする装置をペースメーカーのように体内に埋め込む「迷走神経刺激療法」もあります。手術は小児も安全に行うことができ、保険適用になっています。

―新型コロナウイルスのワクチン接種による影響はありますか。

木下　県のコールセンターには、ワクチン接種の効果や安全性に関する問い合わせが多くあります。接種対象が多様な世代に広がるにつれ、妊婦や10代の子どもさんを持つ保護者などからの相談が増えています。

飯田　てんかん患者さんや家族から、ワクチン接種が病気に与える影響について質問や相談をよく受けます。ワクチンにより、てんかんの症状が増悪した事例は報告されていませんが、発熱で発作が起こりやすい患者さんは注意が必要です。副反応で発熱することがあるからです。接種後に解熱剤を内服することでリスクを最小限にできます。心配なら主治医にご相談ください。

松村　国の定める基礎疾患にもてんかんは含まれておらず、特別視する必要はないと考えます。てんかんの患者さんから相談を受けた主治医は症状をよく聞き、理解した上で、一般の人と同様に解熱剤を渡しています。

―診療体制の現状は。

木下　患者さんを最初に診る1次診療（かかりつけ医）、2次診療（県内の中核病院、難治性の患者さんの外科治療もできる3次診療（広島大病院てんかんセンター）があります。患者さんがより適切な治療を受けることができるよう、こうした3者のネットワーク強化に取り組んでいます。特に地域のかかりつけ医（開業医）の役割を重視しており、広島県指定の「てんかん支援拠点病院」であるてんかんセンターを中心に、医療従事者を対象としたセミナーや研修会を定期的に開催し、診断技術の向上を図っています。

松村　意識障害を起こした患者さんがいれば、すぐに2次診療施設につなぐ体制が整っています。地域には一般的な内科に加え、脳神経内科や脳神経外科、循環器内科もあります。より迅速に対応するには、てんかん専門医の診断を受けられる医療施設の一覧表を作り、インターネットを通じて公表するといった取り組みも必要かもしれません。

飯田　てんかんは、初期診断が難しく、発作症状や脳波を分析して判断する必要がありますが、日本てんかん学会専門医は全国に約700人しかいません。てんかんセンターでは、地域の医療機関が調べた患者さんの脳波のデータを専門医がオンラインで共有し、遠隔診断を行うシステムづくりに着手しました。今後は、人工知能（AI）を活用し、診断の精度を高めるためのプログラム開発も進めていく方針です。

―患者への差別や偏見の解消も課題です。

木下　てんかんは、誰でも、どんな年齢でもかかり得る病気であることを広く知っていただくことが大事です。特に高齢の患者さんの場合は認知症と間違われやすいこともあり、必要な治療につながらない恐れがあります。また、てんかんの症状は家族や周りの方々の気付きも重要だと感じますが、近年、地域のつながりが薄まり、家族や地域の支え合い機能が低下する中で、医療や介護などの分野が連携して、支援を必要とする人を支える「地域包括ケアシステム」の質の向上に取り組むとともに、この仕組みを活用した地域共生社会の実現に向けたまちづくりを進めています。

飯田　てんかんへの理解を深め、最新の治療法を知ってもらうための「市民フォーラム」を毎年開き、今回は12回目になります。また、サンフレッチェ広島とコラボした啓発活動は今年、コロナ禍で中止になりましたが、来年は復活させたいと考えています。

松村　毎年3月26日は国際的なてんかん啓発の日「パープルデー」です。例えば、この日の前後に広島城（広島市中区）をシンボルカラーの紫の光でライトアップするといった試みも、市民の理解を深める上で効果的かもしれません。広島県医師会では11月14日の世界糖尿病デーに合わせて、エールエールA館（南区）にて、また各団体の協力により、県内では7カ所にてブルーライトアップを行う予定です。てんかんの啓発や情報提供にも力を入れていきたいですね。

―ありがとうございました。

11月21日に市民フォーラム2021「てんかんを考える」

広島大病院てんかんセンター長の飯田幸治さんらを講師に迎えた市民フォーラム2021「てんかんを考える～高齢化社会におけるてんかん診療～」（中国新聞社主催）が11月21日（日）13時30分から、広島市東区の広島県医師会館医師会ホールで開かれます。聴講を希望される方は、はがき、ファクス、電子メール、二次元コードのいずれかで15日（月）までにご応募ください（必着）。入場無料。来場の定員150人。オンライン視聴もあります。応募多数の場合は抽選になります。

はがき　〒730-0044 広島市中区宝町5-28 中国新聞アド「てんかんセミナー」係
FAX　082-247-2746
eメール　medical02@chu-ad.co.jp
問い合わせ　082-247-6282（土日祝を除く9:30～17:30）

郵便番号、住所、名前、電話番号、メールアドレス、てんかんに関する質問（あれば）、参加方法（来場かオンライン視聴か）を明記してください。
※質問は講演や質疑応答の参考にさせていただきます。

専用サイトからも申し込みできます。二次元コードを読み取ってください→

※個人情報は、聴講券の発送と抽選に漏れた方への通知（応募多数の場合）のために利用し、中国新聞アドが責任を持って管理します。

広島大病院てんかんセンターへの問い合わせ☎082-257-1719

企画・制作／中国新聞社 地域ビジネス局